

シンポジウム

死と社会

2011年3月11日の東日本大震災において、死者・行方不明者合わせて18,716人（2012年8月現在）の方が犠牲になられました。この途方もない数の人の死は、この社会において何を意味し、今後何を生むのでしょうか。我々の仲間の西谷地晴美さんは、今年の歴史学研究会の大会において、何か大災害がおき、人の大量死が発生した時、人は必ず死者の数を数える。漠然と人の大量死とはとらえず、一人一人の死の集りとしてそれをとらえようとするという事実を指摘されました。そこからしか始められない人の社会の蘇り、それは人の社会の成り立ちに対する深刻な問いを突き付けているように、私には思えました。

そこで死というものが人の社会に持つ意味、生命に持つ意味、それをこの機会に深く掘り下げてみたいと思いたち、今回のシンポジウムを企画しました。通常社会科学は人の生を見つめるところから始まっていると思います。それを反転させてみるとどうなるか。社会科学の革新につながるような議論ができればと思います。ご参加よろしく申し上げます。

（文責・小路田）

◆報告者

佐藤弘夫（東北大学・思想史）

田中希生（京都府立大学・精神史）

小路田泰直（奈良女子大学・近代史）

◆コメンテーター

高木由臣（元奈良女子大学・生物学）

西谷地晴美（奈良女子大学・中世史）

◆日時／場所

12月8日（土）10時30分～16時30分

奈良女子大学文学部南棟S228教室

主催：科研「原子力開発および原子力「安全神話」の形成と戦後政治の総合的研究」

連絡先：奈良女子大学文学部小路田泰直研究室 ☎ 0742-20-3311